

表紙のことば

「驀進」——鉄道写真と私——

福 村 敏

20世紀の日本では、鉄道写真は写真の分野、例えば肖像写真、商業写真、報道写真といった写真表現の分野としては認められていなかった。本学でも同様に扱われ肩身が狭かった覚えがある。

写真を勉強しようと受験した本学へは第二志望の写真印刷科に入学。卒業時、大学の都合で助手として採用された後、当時カラー写真研究室の講師だった原京一氏と出会った。原氏は筑豊の出身で幼いときからボタ山と蒸気機関車の煙を見ながら育ち、中学生の頃から蒸気機関車の写真を雑誌に投稿していて、鉄道写真では既に有名人であった。すぐ意気投合し、撮影のノウハウを教えてもらいながら、北海道に九州にと一緒に各地を巡り、蒸気機関車の写真を撮影していた。また鉄道同好会を立ち上げ男女学生20名ほどと青森のローカル線全線を歩いて周辺の生活と鉄道の写真を撮り、鉄道写真のすばらしさを一般の方々に伝えようと活動をしたこともあった。

写真は銀塩が全盛であったが、カラー研に所属していた原氏の夜間カラー写真は極めて美しく、到底追いつけないと思い、私はモノクロームを主体としていた。一般に印刷をするためには写真階調を網点階調に変換させるが、そのままだと滑らかな写真階調が失われるため、「印刷において写真階調をより正確に再現するには」という研究を進め、業界誌では印刷物での写真表現で一目置かれるまでになった。

芸術学部が立ち上がった頃、当時同窓会会長だった写真家、渡邊義雄氏に声をかけられ、モノクロームの階調の話で盛り上がり、「階調が判る人として今後もがんばりなさい」と助言されたのが印象に残る。

小学校の卒業文集で「鉄道博物館の館長になりたい」と書いた私。鉄道模型と鉄道写真は身体が許す限り続けて行くつもりだが、その原動力というべき印象に残る三つのシーンがある。一つ目は、父親が九時間の大手術を行った日の夜行列車で出かけた豪雪の山形・米坂線。初めての雪中行軍でフィルムもカメラも故障して大変な目に遭ったが、吹雪の中を力強く突き進む蒸気機関車に感動した。二つ目が表紙のシーンで、1973年正月、北海道・函館本線の小沢から分かれる岩内線の貨物列車である。この日は初荷でしかも前夜までの雪で線路が凍っていて定刻には発車できなかった。小さな山間の駅で駅員も少なく、人力で除雪を行う様子が見られ、いつ発車するか解らない。構えているのは駅構内の端だがいつ発車するか解らないので、その場から動けなかった。寒さと飢えに耐えながら、お空の具合と露出計を睨めながら、待つて待つて、やっとシャッターを切った一枚であった。もう一つは次の年の正月、同じ北海道の名寄本線上興部の雪に覆われた牧場。写角に足跡を入れないため、線路から大きく迂回して撮影場所を探す。夏場だったら30分で行けるところを胸まである雪をかき分けながら進むので三時間かかって大汗かいてたどり着き、写角140度のポイントを確認した……。三シーンとも黒い被写体の蒸気機関車と真っ白な雪景色であった。